にぎやかに追慕の杯

築山敬志朗さん（下＝川平愛撮影）
彼にささげた杯（右＝松井宏員撮影）

晴レルデ

文・松井宏員 ― デザイン・シマダタモツ

アサヒ精版印刷の会長、築山敬志朗さんが亡くなってちょうど1カ月後の昨年12月20日、マリさん（築山万里子さん）とバーでばったり会った。スタッフの佐伯尚平さん（46）も一緒だった。

「私、一回も泣いてないねん」とマリさんが言うと、「アサヒのみんなも、そうちゃいます？」と佐伯さんが返す。めいっぱい働いて、めいっぱい遊んで……。「ほんまにやり残したこと、ないと思う」（マリさん）という生きざまが、湿っぽさを遠ざけてるかのようだ。

「最後の会話がね」とマリさんが含み笑い。「亡くなる1週間くらい前かなあ。パパに前から聞きたかったことがあって。じっくりしゃべる親子でもないから今まで聞く機会がなかったんです」。で、聞きたかったことって？　「会社継いでなかったら、何したかった？って」

そしたら？　「ニヤッと笑って、しゃがれた声で『サラリーマン』。うそっ！って噴き出した」。パパの声色をまねしたマリさんにつられて、思わず笑ってしまう。

「音楽好きやったから、そっちやとばっかり思てたんやけど。でも爆笑してから、なるほどと思たんです。父親に引っ張られて大学やめて社長業させられて。印刷機なくしたり業界のパイオニアやったから、評価される立場になったことない。自分がどんなもんか、試してみたかったんとちゃうかな。資金繰りの心配せんと、給料もらって」

マリさんが生まれた時、徹夜マージャンでいなかったという自由人とサラリーマンの取り合わせは想像すらできないが、人は正反対のものを望むのかもしれない。あるいは人生最後のとっておきのギャグだったのか……。ともあれ、パパはマリさんとママに手を握られ、眠るように旅立ったそうだ。

そう言えば、パパが出歩けなくなった頃、コピーライターの村上美香さんが話してくれたエピソードがある。美香さんが事務所近くの道頓堀を犬と散歩してたら、昔お世話になったデザイン会社の元社長とばったり出会った。パパの大親友だったから「ツキさんがしんどそうなんですよ」と伝えたら、「必ず近々会いに行くから、今日俺に会ったことは言わんといてくれ」。

その時を振り返って、美香さんはこう言うのだった。「その瞬間がうれしくて。木の葉がひらりと落ちたみたいに、私と元社長が会って、ツキさんのことを言う運命なのかなと胸がいっぱいになって」。その後、元社長はパパを訪ね「あと5年は生きよう」と励ましたそうだ。「男同士の縁をちょっとだけ、つなげたかな」と美香さん。さりげない、いい話だなと思った。

話はバーに戻る。「小さいころから勉強せえと言われたことない」というマリさん、3年前にパパから社長を継いだが、その時も何も言われなかったという。「ほったらかし！」とマリさんが破顔してグラスを干す。「会社でもそんな感じでした。怒られたことない」と佐伯さんが言えば、「野放し」とマリさんがちゃちゃを入れる。「でも、最後は俺がケツふいたるって、いつも言うてて。それに計算機より暗算が速かった」。最終判断は皆、パパに仰いでいたという。ひとしきり笑った後、「万里子に（社長を）譲っといて良かったって言ってたって、ママから聞きました」と、ちょっとだけしんみり。

その夜は、たまたまパパのゆかりの人が何人か来ていて、にぎやかなことが好きだった故人をしのび、一同でにぎやかに献杯したのだった。